



山本武利 著 (新曜社 2800円＋税)  
『日本のインテリジェンス工作』



研究を始めて半世紀余り、この領域のパイオニアで「泰斗」と称するにふさわしい著者が日本のインテリジェンスの歴史を総合的に概観。普通の英和辞典では「インテリジェンス」とはまず「知能、理解力、思考力、知性」と訳し、次いで「情報、通報、報道」と続く。しかしここではさらに一歩進んだ「諜報、防諜、謀略」という軍事・政治の専門用語・概念である。語源から見ると「間」と「選ぶ」から成り、「行間を読む」という意味でもある。

昨春に開校した日本大学危機管理学部(東京世田谷)はテロや災害に対するリスクマネジメントが眼目のようだが、当然インテリジェンス研究も対象になるだろう。著者は『朝日新聞の中国侵略』(文藝春秋)などの新聞研究から『GHQの検閲・諜報・宣伝工作』(岩波書店)に代表される研究領域に進み、そのGHQ民間検閲局CCDが検閲・押収した占領期の過半の活字メディアの資料実物を保管蔵書しているメリーランド大学ゴードン・W・プランゲ文庫の新聞・雑誌記事情報データベースを作り上げ、現在ではNPO法人インテリジェンス研究所を通じて検索の用に供している。

本書は米国立公文書館をはじめとする一次資料に基礎を置く九つの論文より成る。発表済

みの論文を寄せ集めて一冊の「新刊」に変身させるお手軽な手法が珍しくない中で、元原稿を再度吟味し加筆訂正した歴史学者としての矜持は誠に称賛に値する。

著者が強調しているのは、アジア太平洋戦争の敗北で味わった消し難い屈辱を忘れず、一、二世代前の先人の経験を冷徹に検証・評価し、自らのインテリジェンス・リテラシーを高め、あるべき日本のインテリジェンスの方向を見定めたいということである。

第1章は陸軍中野学校の公文書は全て焼却・廃棄されているとされてきたが、防衛省防衛研究所に秘匿されていた資料を発見し当時の関係者の裏付けを取って明らかにしたものだ。

第2章は米国の特務機関だったOSSやMISが日本の特務機関や憲兵について分析し「延安レポート」に代表されるような成果を上げる一方、特務機関背後の参謀本部にまで追及は及ばず、秘密保持された中野学校は全く知られていなかったことが明らかにされる。

第3章ではオーストラリア軍の文書からの引用。ジャワ、スマトラ、ニューギニアに詳しいのは地理的に当然で、また南方では海軍特務部と並び物資獲得を狙った商社のインテリジェンス活動が無視できないことも提示される。

第4章から第7章は満州と中国で展開された情報戦の解明。「満洲国」の一般のメディアによって担われた日本イデオロギーの宣伝戦、その中核を担った統制のマニユアル『宣撫月報』、満洲電報によるラジオ放送も取り上げる。『宣撫月報』がいち早くアメリカの政治学、心理学の手法を取り入れて、むしろ戦後に役立つのも興味深い。またラジオ受信機の普及は同時に敵側の放送も受信できるというもろ刃の剣であったことは歴史の皮肉である。さらに中国大陸で練り広げられた「新聞操縦」と謀略の実態を明らかにしている。馬淵逸雄や影佐禎昭などの「活躍」が有名だが、一時の成功が裏目に出たと分析している。

第8章は作家森村誠一の『悪魔の飽食』で注目を集めた陸軍731部隊(石井部隊)が人体実験や生物兵器開発に従事する一方でそれらを秘匿するためにインテリジェンス感覚を研ぎ澄ましてきた事実、それ故に石井はしたたかなインテリジェンス工作者でもあったと判定している。

第9章はポツダム宣言をいち早く入手した辣腕の「スパイ」小野寺信陸軍少将が戦後GHQに供述・証言した原資料の紹介である。それが戦犯免責の故であったかは推定の域を出ないようだ。

1章と8章は共に入手しやすい『新潮45』掲載である一方、7章と9章は年一回刊行の会員制雑誌『Intelligence』(文生書院刊)掲載でなかなか読める機会が少なく、他の5章は高価な講座や資料集に掲載されており、アクセスは容易ではなく、関心ある者にとって本書の果たす役割は大きい。

(小幡 利夫 書籍輸入コンサルタント)